東洋文庫と私 ③

東洋文庫との出会いを語っていただく最終回です。東洋文庫全点フェアは好評裡に終りましたが、復刊書目にも品切れが続出したため、再度重版し、五月中旬には全巻揃う予定です。

身辺賞玩の書

田辺聖子

小説家にとっては東洋文庫はネタの宝庫である。私はどれだけ東洋文庫に裨益されたかしれない。

はじめは何心もなく書店でみつけて買った『絵本江戸風俗往来』であった。これは菊池貴一郎著・鈴木棠三編なるもの。昭和四十年代のはじめ頃入手したと思うが、これで東洋文庫の存在を知った。

この本は江戸のくらしのさまざまを絵入りで紹介してある。『武江年表』（斉藤月岑著・金子光晴校訂）などとともに、江戸の雰囲気を味わうには恰好のもの、而うして情報源でもある。

物書きは情報を必要とするが、情報だけで小説は書けない。

時代小説がふるわないと聞くが、時代の情報だけで小説を書く作家がふえたからかもしれない。情報よりむしろ、その時代の気分が感じられないと作品のコクが出てこない。それにはその時代の気分が作者のうちに捉えられ、醸成されていなければならぬ。たとえば『絵本江戸風俗往来』は江戸の気分を味わうのにうってつけである。私は時代小説はまだ書かないが、「古川柳おちぼ拾い」を書くため、この本を愛読した。『絵本……』は幕末の江戸で、『柳多留』はそれより古いが、それでも〈江戸時代〉の気分に精神を薫染させるによく適った。

東洋文庫にはまた、〈女のすなる〉日記や手記が発掘されているのも嬉しい。『小梅日記』（川合小梅著、志賀裕春・村田静子校注）全三巻は紀州に住んで、幕末・明治と、世のうつりかわりを見た主婦の、克明微細な日記で、世上の動乱から、日常次元の瑣事に至るまで記されている。献立まで書いてあるが、さすが紀州のことととて魚類が豊富である。小梅の夫は紀州藩の藩校「学習館」の学長であるから来客も多い。これらの客がみやげに提げてくる魚は、「中鯛三つ　あぢ三つ　大ちぬ二つ　目ばる五つ　大ぼら三つ　糸より五つ　れいこ鯛三つ　赤魚二」（安政六年二月廿九日）というありさま。この日記は事務的で、小梅の個人的感情はあまりしるされていないが（体調は時々記入される）、また、それだからこそ、長年にわたって記入されつづけたのであろう。あまりなまなましい記事の日記であると、書いた当人がいやになって破いてしまうことが多い。私は維新前後の庶民生活に大いに興味があるが、（残念ながら、『小梅日記』ではこのかんじんの部分が欠落し、未発見である。慶応三年から明治九年に飛んでいる）小梅の生活はそのころの時代の匂いをよく伝える。慶応三年十一月十五日、京都で坂本竜馬が暗殺されたというニュースは、十二月七日のくだりに書かれている。

しかしながら私のやはり一ばん愛するものといえば『名ごりの夢』（今泉みね述・金子光晴解説）をあげなければならない。これは「蘭医桂川家に生れて」とサブタイトルにあるように、桂川甫周の娘、みねが八十一歳から八十三歳までの間の聞き書きである。幕末維新史の珠玉といわれるが、この本の香気は昭和六十二年のいまもなお褪せない。

蘭医の家庭というのもふしぎな世界だが、語り手の老婦人の、ゆるゆるした話しぶりに手を曳かれてのぞいてみると、それはなんと開明的で、楽しく、のびのびした環境であることか。

語り手のけだかい見識によって描き出される人々、そして江戸の社会の悠揚たるくらしぶり。

人間のくらしというもの、人間の誇りというもの、人間の才能というもの、そういうさまざまのことを、この本を読んでから考えずにはいられない。それらを触発するものを持った本である。桂川甫周の名は、幕末史で見かけてお馴染みであるが、そのまわりに集る秀才の群像も印象ぶかい。

それから語り手は、江戸の心意気、武士の家の心意気について郷愁こめて話す。

「ほんとうの美人」というくだりが面白い。

「近ごろいったいに美人はいないように思います」

と今泉みね夫人はいう。鼻が高いとか口元しまって色白で、というようなのを美人とはいわないとみね夫人はいう。今日見てよくても、明日いやになるようなのは美人ではないと。

「色が黒かろうが鼻がひくかろうがまた口が大きかろうが、ほんとうの美人には思わず引きよせられます」

これはみね夫人の見識の高さを示唆するものでもあり、江戸びとの文化の高さでもあろう。

「気合から出たおつくり、気合いと気合いがしっくり合って、どちらからも好いてしまった。そこにいたってなんの境もなくなります。昨日あってよく今日見てあきない、どことなく慕わしくなつかしく、そばによりたい、言葉をかけられてもうれしくってたまらない、愛くるしくって、おとなしくてしかも見識の高いもの、頭の下るようなもの、そんな婦人を昔は美人といったように思います」

安心して『名ごりの夢』をよめると思うのは、こういうくだりがふんだんにあるからである。江戸には文化があったなあ……と思わざるを得ない。

「武士の娘」というのもある。

「むかしの婦人はふだんごくやさしくって、事があるとまるで人が違ったようになりました」と。「武士と言う考えが強くって、小言を言う時にもすぐおまえは誰それの家の娘ではないかと言います」。

ことに感じ入ったのは、昔の武士の家では「めったにしおきということはしません」という。

母親の一言だけで、子供には利く。「いけませんというとブルブルとする、このあじわいは何ともいえません」「つまり母親のにらみがきいたのでございますね。今はそれがないからすぐたって行ってぶったりいたします」

京の公家の姫の気位もたかい。京都のさる橋のたもとに、見すぼらしい身なりの少女が遊んでいた。通りがかりの者が「おい、ねえさん、どこそこに行くのだが」と道をきいても「ウンともスンとも答えません」。

男がなおも問うと少女はふりむいてただ一言、

「身は姫じゃ」

ときりっとして言ったきり、また遊んでいたという。これも私の愛する話だ。

そうかと思うと、いかにも江戸風な夢幻譚もある。公方さまが観能のあと、ひろい座敷で脇息にもたれ、うとうとしていられた。夜はしんしんとふけわたり、草木もねむる丑三つごろ、どこからか、チャカポコチャカポコと鼓の音がする。はて何であろうと思えば、畳のへりから一寸ばかりの人形がかずしれず湧き、それがみな烏帽子装束、狩衣すがた、鼓を打つ者あり、笛を吹くものあり、みな小さい金づくりの舞扇を手にして、

「小、小、小袴
小狩衣に小烏帽子
夜も更けて候に
カッポンカッポンカッポンポン」

と歌いつつおくゆかしく踊っていたという。これこそまさしく江戸の名ごりの夢——かぐわしき、江戸の〈時代〉の匂いである。私の座右において愛するゆえんである。

（たなべせいこ／作家）

三 東洋文庫」とアンビバレンス

吉川勇一

人間とは勝手なもので、忙がしくなればなるほど、むしょうに本が読みたくなる。集会だ、会議だ、デモだなど市民運動の行事がつまり、深夜の帰宅が続くと、買ったままいつかは読もうと積んである本がえらく気になってくる。今も疲労と煙草の吸いすぎでボーッ

とすわっている私の机の上には、復刊して全点揃った「東洋文庫」の目録がある。それをパラパラとくると、不思議な魅力をもった別世界が手をいっぱいに広げて私を誘惑する。二つに分裂する気持をなんとか結びつけようと考えるうちに睡魔が襲う。そんな日々である。

「東洋文庫」に接するたびに見舞われるこのアンビバレンスは、これまでの人生のなかでいつもあったアンビバレンスに重なる。学生時代、成城の民俗学研究所に通っていて、柳田国男氏に師事しながら、朝鮮戦争下の学生運動に飛びこんで以後、似たような思いになんどもとらわれたものだ。

"Yokohama Dialect"という小冊子がある。タトルから復刻されたもので、原版は一八七九年（明治一二）発行だから今から一〇〇年以上も前の、いわば、「英日会話簡易便覧」といったものだろうか。

私は、このパンフレットの復刊版を知人の洋学史を研究しておられる学者、川澄哲夫さんからいただいたとき、いったいこれは、実在したものなのか、はたまただれかがいたずらで作ったものなのかわからず、考えこんだほどだった。

たとえば、パンフの冒頭にある献辞の下に、「金があるときゃ『リキショー』（人力車）にのるが、金がなくなりゃ『チキショー』（畜生）といわれる」というざれ歌のようなものが引用されていて、「日本の古歌（old Japanese poem）からの訳」とされていたり、第一版への序文の日付に「一八七九年三月三一日、明治一三年」とあるが、これは一年ずれているし、また「明治」の説明に「神武天皇二番目の従兄弟」とあったりするのは、ふざけているのか、無知による誤解なのか、見当もつかなかったからだ。しかし、実在のものだったとすれば、あとでもふれるように、これは実に面白い。言葉のまったく通じない庶民同士が必要に迫られて接触し、意思を疎通させなければならなくなったとき、どういう共通の記号が生みだされるのか、いや、そんなむつかしい話でなくとも、「Church - Oh terror（お寺）」だの、「Strong, well - Die job（大丈夫）」など、見ていて実に楽しくなる。

これについてもっと知りたいものだと思っていたら、ある日、「東洋文庫」B・H・チェンバレンの『日本事物誌 2』「異人の日本語」に「昔、横浜に在住していたホフマン・アトキンソン氏は、この題目（「ピジン日本語」のこと）について、まことに面白い本を書いた。題して『横浜方言集』という。しかし、日本語をほんとうに知っている者でなければ、その面白味を充分に味わうことは不可能であろう」とあるのを見つけた。チェンバレンは、そのあと、この『横浜方言集』からいくつかの例を引いている。その中に「灯台」はフネ・ハイケン・セランパン・ナイ・ローソク、「海上保険検査官」はセランパン・フネ・ハイケン・ダンナサンなどがあり、「東洋文庫」の訳者高梨健吉氏は、この片仮名の部分に〔船拝見破損無い蠟燭〕、〔難破船拝見旦那さん〕と訳をつけている。『横浜方言集』の原文のそこの部分はこうだ。

A lighthouse
Fooney high kin serampan nigh rosokoo
Marine insurance surveyor
Serampan funey high kin donnyson

これで、この小冊子が実在のものであったことは知りえた。つぎには、ここ以外にも各所に出てくる。serampanという言葉が気になった。高梨氏は、これを「破損」とか「破壊」という意味に訳されているし、たしかにそう考えれば、「Pistol - Cheese eye serampan」（小さいセランパン）もわかる。だが、なぜserampanがそういうことになるのか。

私の無知をさらすことになるわけだが、『日本国語大辞典』（小学館）をひいてみて驚いた。「さらんぱん【名】（マレイ語 sarampangから。また、フランス語 ce-la-ne-pas（無くなせり）から出た語かともいう）物品がこわれたり、または約束が破れたりすること。めちゃめちゃ。元も子もなくなるという意に用いる」とあるではないか。

その後、出版社に勤務している友人が、服部之総の『黒船前後』にも、それにふれたものがあることを教えてくれた。それには、「サランパン」が今でも上海で使われているピジン・イングリッシュだと指摘している。

一〇〇年前の横浜方言から、ピジン・イングリッシュ、上海、そしてマレー語へと、まさに「東洋文庫」がカバーしているあの領域へと思いは広がっていく。欧米商館と足跡をともにして広がっていく一つの言葉の変遷は、帝国主義と植民地主義の足跡とからみあい、また、言葉を異にする人間の、しかも庶民の

交流の足跡とも重なる。たまたま手もとにある「東洋文庫」の書名でアトランダムに言えば、マンデヴィルの『東方旅行記』であり、ピントの『東洋遍歴記』であり、さらに『バタヴィア城日誌』であり、『ラッフルズ伝』であり、『アブドゥッラー物語』の世界である。

ここまで来て、私は、そういう世界に無限にわけ入ってみたいという、ひきこまれるような誘惑をおさえがたくなる。と、そのとき、その領域の現在の問題――平凡社の本でいうなら、鶴見良行・山口文憲共著『越境する東南アジア』や『東南アジアを知る事典』、さらにはエドワード・W・サイード『オリエンタリズム』などによって、私たちに今の問題として突きつけられている日本とアジアの関係の課題、私たちが当面する現実の問題にひきずりもどそうとするブレーキが、私の中でかかる。

もう一例。「東洋文庫」で『アメリカ彦蔵自伝』を読む。一三歳の少年が異人の船に救われて、はじめて耳に残り、理解した異なる言葉が「プレンティ」〔たくさんある〕であったことを知る。言葉のまったく通じない人間同士が、最初に交わし、覚える言葉は、ほかの場合にはどうだったのだろう、という関心が強く強く湧いてくる。ジョン万次郎は、大黒屋光太夫はどうだったのだろう……。万次郎を紹介する鶴見俊輔氏の文章（たとえば『ひとが生まれる』ちくま少年図書館、『日本人の地図』潮出版社）に感動し、教えられる。そしてさらに、作家はその作品で、そういう場面をどう想像し、描いているのだろうか、と思いは広がる。言葉の通じぬ人間同士の初めての出会いの場面をつぎつぎとあさり、読みはじめる。ロビンソン・クルーソーが初めて「フライデー」に教える言葉が、「マスター」であることを知って、あらためて衝撃を受ける。なるほど、とも思う。ここまで来ると、また、私の中で、例のブレーキがかかる。

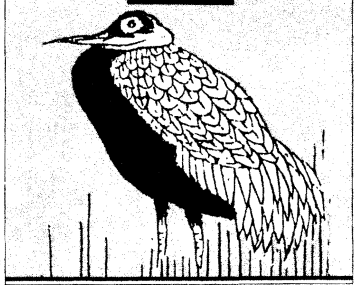
バンコックやマニラなど、東南アジアに赴任した日本人商社員やその家族に、商社や現地日本人会などが用意した「現地人召使い」への対応の仕方を書いたマニュアルや、日本の電気産業の大労働組合が、東南アジアの系列会社の労働運動に対する傲慢な「指導」の報告書などの問題と、それは結びついて、ふたたび現実世界へ呼びもどされる。民俗学や民族学に興味をもった学生時代、マリノフスキーの、たしか『未開社会における犯罪と慣習』の序文だったと思うが、それを読んだときのショックと、その後のアンビバレンスの感情が想い出されてくる。私は「東洋文庫」を置いて、市民運動の集会にでかける。

「社会党と市民運動との対話集会」に出た直後、神保町で求めた『南洋探検実記』と『知恵の七柱』をじっくり読めるのはいったいいつの日のことだろうか。

（よしかわゆういち／元ベ平連事務局長）

●「東洋文庫解説目録」および、書目を八分野に分類した「東洋文庫内容見本」を新たに作成しました。御希望の方は小社営業部あてに御請求ください。

東洋文庫



466
和漢三才図会 6
全18巻
寺島良安／訳注＝島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳
大坂の医師寺島良安が中国の《三才図会》にならって編んだ日本で最初の図入り百科事典。原典の全図を収め、本文を口語訳した。本巻は巻37～44で家畜・獣・鼠・鳥類を収載。江戸時代の人々と動物とのかかわりは？ ●定価3,000円

467
四民月令（しみんがつりょう）
漢代の歳時と農事
崔寔／訳注＝渡部武
祭祀や農作業、家計、教育、製薬、養生、商業活動など、月ごとの日常生活に指針を与える年中行事を誌す本書は、古代中国の豪族社会のこまごまとした生活風景を占描し、我々に貴重な社会史の資料を提供してくれる。●定価2,400円

平凡社